（第3種郵便物認可）

女川の記憶 写真で語る

住民持ち寄り

世代超えて 思い出話

祭りで大漁旗を掲げる船、仮設住宅の部屋に集った入居者たち。女川町で撮影された100枚以上の写真を住民が持ち寄り、話し合うワークショップが8日、町生涯学習センターで開かれた。自身も女川で生まれ育った写真家の鈴木麻弓さん(49)が企画した写真展の関連イベントで、来場者は世代を超えて盛り上がった。（小池由記）

ワークショップで写真を囲み、思い出話に花を咲かせる鈴木さん（右）と参加者（8日、女川町で）

■祭りや結婚式

「あら、これ私だ。この横に旅館があったはず」。高齢の女性が声を上げる。「震災の年の獅子振りだ。津波で全部流されて大変だったね」と、別の女性がしみじみとつぶやく。船乗りの若者や祭りの様子、結婚式の場面などが写っていて、思い出話が尽きない。古くは昭和20年代の白黒写真もあった。

同町竹浦区長の阿部貞(ただし)さん(75)はカメラが趣味で、震災前の風景や復興を記録したカットを多数持参した。大学生から「いつの写真ですか」と熱心に質問が飛んだ。住民には津波でアルバムごと失った人も多いが、2階にあって無事だったという。「写真は何年たっても記憶をたどれる。震災後はそう気づき、町や港の風景を意識して撮るようになった」と語った。

昔の女川の人たちの表情や浜の空気感を、いろんな年代の人が共有する。「写真を見ながら会話するのが大切だとあらためて感じる。いい機会になった」。主催した鈴木さんは満足そうに語った。

■記憶 浮き上がる「潮の贈り物 故郷」と題した写真展は、町制施行100周年に合わせて鈴木さんが企画した。仮設住宅でお茶飲みする女性、高台移転の工事風景など15年間撮りためた16点を、町役場1階ロビーで展示している。

女川という町の過去は層のように重なっていて、震災で一度海に沈んだが、写真を通して記憶がまた浮き上がる。そんな思いをタイトルに込めている。

父・佐々木厚さん（当時72歳）が海沿いで営む佐々木写真館に生まれた。東京の大学で写真を学び、海外で仕事をするようになった。震災の日は神奈川にいて無事だったが、実家の写真館は暗室だけを残して津波で流され、厚さんと母の克子さん（当時66歳）は今も見つかっていない。

厚さんは仕事柄、町内の中学校の卒業アルバムのクラス写真をよく引き受けた。背景は学校ではなく、女川の町並みが写る。クラスごとに場所を決め、撮りに行くのが恒例だった。

卒業後、町外に出る生徒も多い。「アルバムに故郷の景色を残してあげたいから」と父は生前語っていた。津波で被災した今、鈴木さんには父の思いが痛切に分かる。会場では、厚さんが撮影した1986年度の中学校の卒業アルバムのクラス写真も展示している。

写真展は25日まで。午前8時半～午後9時（25日は午後3時まで）。入場無料。

活気ある祭りや港の情景など、日常を切り取った写真が集まった

地元出身力士に歓声

気仙沼巡業 27年ぶり

大相撲の気仙沼巡業が20日、気仙沼市の市総合体育館で行われた。横綱大の里ら人気力士が参加し、稽古や取組を見に集まった観客約3000人を沸かせた。

取組に臨む序二段の佐藤（左）（20日、気仙沼市で）

地元出身力士も土俵に上がり、観客はひときわ大きな声援を送っていた。

夏場の東北巡業の一環で、同市で開催されるのは27年ぶり。この日は横綱の